

明代雲南に残した日本人の漢詩

——その二『滄海遺珠』所収日本人の漢詩の研究——

王 宝平

はじめに

前稿では、主に『滄海遺珠』の編者、版本、および評価をめぐって論考してきた。本稿では『滄海遺珠』に掲載された日本人の漢詩について考察したい。

本題に入る前に、本テーマに関連する先行研究を紹介しておこう。最初に本テーマの研究にメスを入れたのは、中国学の碩学なる松崎鶴雄（1867—1949）である。勝海舟の直弟子とされる彼は、「雲南に於ける日本詩僧の遺韻」（1943）で、『滄海遺珠』所収の日本人の漢詩を披露した⁽¹⁾。その後、半世紀もの沈黙が経過して、本課題が改めて学界の俎上に載せられるようになった。中国側からは、「明初留寓雲南的日本僧人」（1980）、「明初旅滇的日本僧人」（1991）、「大理的日本四僧塔与到大理的日本僧人」（2002）、「明初の中日関係与寓滇日僧」（2009）が発表され⁽²⁾、日本側からは、「雲南の日本詩僧」（1991）、「六百年前の雲南留寓日本僧」（1991）、「中国・雲南に流罪となった南北朝時代の日本人僧たち」（1996）、「明初の訪中日本人僧侶たちの雲南への留謫」（2000）、「日明交流と雲南」（2009）が公表された⁽³⁾。これらの研究は、日本人の漢詩の紹介や、雲南流放の原因を探ることに力点が置かれる嫌いがある。また、明代大理に客死した現存の日本人の墓—日本四僧塔に関する発掘報告（2002）も公表され、本研究に考古学の資料を提供している⁽⁴⁾。

これらの日本人僧侶が雲南にいた理由については、明代の右宰相を務める胡惟庸が、洪武十三年（1380）に、日本人と結託してクーデターを企てた事件⁽⁵⁾が発生したおかげで、大量に渡明していた日本僧が雲南等に移送されたというのが、ほぼ定説となっている。

雲南に移送された日本僧は10人、大理の弘聖寺に安置されたという説もある。

明の初め、東瀛の高僧紀先、照寂、斗南、天禪、彦宗、洪幻、曇演、大用、

天祥、天梵、原果が大理に至る。10人の僧侶は、元至正の際に元の都に渡り、元に仕えていたが、明の初め、事があり、罪を得た。太祖が雲南を平らげてから、大理に流された。総兵徐進は、仏教を信じ、文化人との交わりが好きなので、10人の僧侶が日本から中国に渡り、中国の文化を習い、仏教に関する見識が広く、高僧仏燈・仏源を師と為し、明朝を敬うことを知り、礼遇した。10人の僧侶が弘聖寺に安置され、共に雀巢長老に仕える。長老は衣磔を与え、囚籍を無くして、弘聖寺の護法僧にした。そして、斗南、天祥を知客執事に封じた（下略）⁽⁶⁾。

とある。罪を獲得したという10人の日本僧は、大理に流され、総兵の徐進の礼遇を受け、著名な弘聖寺に配属され、雀巢長老に仕えた。そして、みな犯人の身分を無くされ、弘聖寺の護法僧となり、そのうち、斗南と天祥は知客執事（接待係）を担当した、という。

この史料の真偽については、異論を唱える人もいるが⁽⁷⁾、小論は、主に『滄海遺珠』所収の日本人の漢詩そのものについて、新たに考察を加えたい。

一、『滄海遺珠』所収日本人の漢詩

『滄海遺珠』に登場する日本人は5名である。僧演此宗、斗南和尚、僧天祥、僧機先、そして僧大用である⁽⁸⁾。前二者については、本人の詩は未掲載であるものの、中国人から贈られた詩で、日本人ということがわかるのである。たとえば、僧演此宗については、下記の詩2首が贈られている。

贈日本僧演此宗	日本僧演此宗に贈る
	一曾烜
達摩居嵩九載期	達摩、嵩きに居ること九載の期
此宗寂寂有誰知	此の宗、寂寂として誰か知るもの有らん
生従日本精三藏	生まれて日本に従ひ、三藏に精 ^{くは} し
老向雲南礼六時	老ひて雲南に向かひ、六時に礼す
香満墨池臨旧帖	香、墨池に満ちて旧帖に臨み
花明春鶯詠新詩	花、春鶯に明らかにして新詩を詠ず

別来应有驚人句	別に応に人を驚かす句有らん
好寄東風慰所思	東風に寄せ、思ふ所を慰むに好し
	(『滄海遺珠』卷一)

寄演此宗	演此宗に寄す
	一平韻
秋風起江漢	秋風、江漢に起き
織月在西南	織月、西南に在り
影落清滇水	影は落つ、清滇の水
涼生白石龕	涼は生ず、白石の龕
唱酬蔬筍氣	唱酬に蔬筍の氣あり
夢寐葛藤談	夢寐に葛藤の談あり
未遂依禪寂	未だ禪寂に依ることを遂げず
徒慙雪滿簪	徒だ雪の簪に満ちることを慙ず
	(『滄海遺珠』卷二)

と曾烜の贈詩のタイトルに「日本僧」と明記されているため、演此宗が日本僧という情報を教えてくれた。

また、斗南和尚についても下記の2首が見られる。

送鏡中照上人兼柬斗南和尚	鏡中照上人に送り、兼ねて斗南和尚に柬す
	一樓璉
旧住扶桑第幾山	^{もと} 旧扶桑第幾山に住み
偶然踪跡落人間	偶然、踪跡、人間に落つ
蘿衣拂露辞秋壑	蘿衣、露を払って秋の壑を辞し
藤杖扶霜度曉関	藤杖、霜を扶けて曉の関を渡る
滇海飛来孤月小	滇海飛び来たり、孤月小さく
点蒼留得半雲間	点蒼留め得たり、半雲間 ^{しづ} かなり
殷勤為報圓通客	殷勤は圓通の客に報いんが為ならん
鶴背清風好共還	鶴背清風、共に還るに好し

(『滄海遺珠』 卷二)

謝斗南禪師惠竹杖	斗南禪師の竹杖を恵むに謝す
	—楊宗彝
扶桑禪子下蓬萊	扶桑の禪子、蓬萊より下り
携得仙人竹杖来	仙人の竹杖を携え得て来たる
瘦節只疑同鶴骨	瘦節、ただ疑ふらくは鶴の骨に同じかと
虚心猶恐是竜胎	虚心、なほ恐らくは是れ竜の胎かと
衰年正頼扶持力	衰年、正に扶持の力に頼り
異日須知變化材	異日、須らく變化の材を知るべし
不怕石頭溪路滑	石頭、溪路に滑ることを恐れず
月明隨意步蒼苔	月明らかにして、隨意に蒼苔を歩む

(『滄海遺珠』 卷三)

と両詩の首句に、それぞれ「扶桑」という日本を意味する語が使用されていることから、斗南も日本人ということがわかった。

以上、僧演此宗、斗南和尚も日本人であるが、『滄海遺珠』に詩が未掲載のため、これ以上立ち入るのを遠慮する。ここでは、漢詩の掲載された僧天祥、僧機先、僧大用に限って論じることとする。

『滄海遺珠』第四巻の最後に、僧天祥、僧機先、僧大用という順に3人の漢詩が掲載されている(図録1)。彼らの名前の後ろに、すべて「日本人」と細字で記されているため、日本人ということがわかったのである。以下、掲載順に記しておく。

1. 僧天祥

『滄海遺珠』巻四に、彼の詩が下記のごとく11首所収される。「寄南珍」(五律)、「題竜関水楼」(五律)、「次韻惟心見寄」(五律)、「贈李生」(五律)、「送僧帰重慶」(五律)、「哭宋士熙」(五律)、「呈同社諸友」(七律)、「夢裏湖山為孫懷玉作」(七律)、「長安春日作」(五絶)、「榆城聽角」(七絶)、「暮春病懷」(七絶)と、五律・五絶7首、七律・七絶4首となっている。

このほか、『日本図纂』（『鄭開陽雜著』卷四）、『四朝詩』（明詩卷 91）、『列朝詩集』（閩集）、『吾妻鏡補』（卷 21）に、天祥の「題虚邱寺」という七律 1 首が掲載されている。そのうち、『列朝詩集』と『吾妻鏡補』では、すべて『滄海遺珠』を出典と明記し、「哭宋士熙」の次に入れてある。『列朝詩集』『吾妻鏡補』の記載ミスか、天祥「題虚丘寺」所収の『滄海遺珠』の別本が存在しているのか、今後の研究に俟ちたい。天祥の「題虚邱寺（虚邱寺に題す）」は下記のとおり。

東西両寺今為一	東西の両寺、今は一たり
有客登臨見断碑	客有り登臨し断碑を見る
剩水残山王覇業	剩水残山は王覇の業
苦風酸雨鬼仙詩	苦風酸雨は鬼仙の詩
楼台半落長洲苑	楼台、半ば長洲の苑に落ち
簫鼓時来短簿祠	簫鼓、時に短簿の祠に来たる
盤郢魚腸何処是	盤郢魚腸、何れの処か是なる
輓軋千尺響空池 ⁽⁹⁾	輓軋千尺、空しき池に響けり

また、上記の『葉榆稗史』に、下記为天祥の詩が記されている⁽¹⁰⁾。

(自詠詩題弘聖寺塔壁)	(自詠詩、弘聖寺塔壁に題す)
仏祖渡我無形舟	仏祖、我に渡るに無形の舟あり
東海茫茫順潮流	東海茫茫、潮流に順ふ
坦然慧根結舍利	坦然たる慧根は舍利に結ばれん
真是実成实是真	真に是れ実成にして實に是れ真なり
悼李宓	李宓を悼む
天宝飲恨万骨枯	天宝、恨みを飲みて万骨 ^か 枯る
西洱河畔葬征夫	西洱の河畔に、征夫を葬る
華清池辺聽讒言	華清の池辺に、讒言を聴く
千家万戸嚎啕哭	千家万戸、嚎啕と哭す
詠点蒼	点蒼を詠ず
盤古造蒼穹	盤古、蒼穹を造り
巨靈削屏峰	巨靈、屏峰を削る

青竜下馮河	青竜、馮河に下り
寒暑瞬息中	寒暑、瞬息の中なり
雲鎖横玉帯	雲鎖、玉帯を横たへ
玉泉沃南中	玉泉、南中を沃す
清溪濯足女	清溪に足を濯 <small>なんじ</small> ふ女
山花挿鬢蓬	山花を鬢蓬に挿せり
山僧塵心浄	山僧、塵心浄し
因果一夢通	因果、一夢通ず

(題竜尾関風雨閣)

(竜尾関、風雨関に題す)

僧是竜種竜是僧	僧は是れ竜種、竜は是れ僧なり
幾度梅花幾度非	幾度か梅花にして、幾度か非ざらん
景陽鐘催断雲雨	景陽の鐘は催 <small>うなが</small> して、雲雨を断ち
淚撒秦淮湿玉階	淚は秦淮に撒 <small>す</small> てて、玉階 <small>うるほ</small> を湿す
王孫迷途覓前径	王孫途に迷ひ、前径を覓む
了断塵縁識梵音	塵縁を了断し、梵音を識る
縱然靈山路遙遠	縱然たる靈山、路遙かに遠し
削髮落得一生輕	髮を削り、落ち得たり一生の輕ろきことを

さて、天祥については、松崎鶴雄は『五山文学歴伝』『五山詩僧伝』に依拠しながら、次のように書いている。

天祥、名は一麟、一庵と号す。始め天祥と号す。京師の華胄九條家の庶子なり、元徳元年（足利時代）に生る。幼にして建仁寺大中庵の東海源に依りて童役を執る。17歳にして得度し、南禅寺建仁寺の間に遊ぶ。永和三年薩州の大願寺に住し其後筑前博多の聖福寺、京都の万寿寺、建仁寺に住す。応永十四年十二月二日遷化す。寿70ママ才。辞世の偈に、

有有有有有。無無無無無。裂破鉄絲網。擊碎驪領珠。

支那に遊び柳子厚の文法を伝えふ。其書室を「泉声幽処」といふ。著書に佛祖歴年図二卷、蔵叟箋十卷、語録二卷、竜延集一卷。⁽¹¹⁾

とある。元徳元年は元天暦元年（1329）、応永十四年は明永楽五年（1407）に当たる。

文中の「寿 70 才」とは、79 才の計算ミスであろう。この記載が正しければ、彼は『滄海遺珠』の編者沐昂（1379—1445）より 50 才も年上で、『滄海遺珠』成立時の正統元年（1436）に、死去してから已に 29 年も経過していることになる。一方、『五山文学史稿』では、天祥のことは記されているが、中国に渡航したことは触れていない⁽¹²⁾。博多の聖福寺等の住職を務める天祥は、『滄海遺珠』の天祥と同一人物の信憑性が極めて低いと思われる。

『滄海遺珠』の天祥については、上記の『葉榆稗史』で、大理の弘聖寺で斗南とともに「知客執事」（接待係）を命じられた以外に、このように記録されている。

天祥、詩を好み、口数が少ない。書画、すべてうまい。蘭亭の書に長じて、筆意は神業の域にいつている。（中略）天祥は 74 才で成仏。弘聖寺の後に葬られる。斗南、遼光古の墓の北方十歩にあり、六方の幢型を為す。靈塔に詩碑が 4 つ作られ、彼の詩 60 首を選び、達果が揮毫した。⁽¹³⁾

と無口であるが、詩書画ともに巧みである天祥のことが描かれている。達果により選せられた 60 首の漢詩が碑に刻まれ、靈塔の周りに飾られているというのは、作詩好きな彼をしのぶ最高、且つ最適な方法となろう。また、斗南、遼光古の墓を北に 10 歩近くに埋葬されるとは、生前中のこの 3 人の親密な仲を示しているとともに、あの世に逝ってからも交流ができるように、と地元の人々の善意がじかに伝わってくるものがある。

引用文にある達果とは、大理総管なる段隆の四男段文のこと。九才、大理の無為寺に出家し、智能住持に教わり、法名、達果を賜う。洪武の初め、唐代の開山とされる無為寺の第 35 代の住持になる。洪武二十五年（1392）、楊黼、宝姫らとともに「七子詩社」を作り、「南中七隱」の一人と称せられる。著に『十方集』がある。

天祥の事績を知るには、『葉榆稗史』以外に、彼が残した詩も重要な手がかりになろう。彼が書いた詩を辿ると、実に中国の多くの地域を縦断したことがわかる。「何事長安客、春来思易迷。楽遊原上草、無日不萋萋。」（「長安春日作」）からは、長安に春を過ごし、「題虚丘寺」からは、蘇州に一遊したことが察せられる。また、「杭城一別已多年、夢裏湖山尚宛然。三竺楼台晴似画、六橋楊柳晚如煙。青雲鶴下梅邊墓、白髮僧談石上縁。残睡驚来倍惆悵、可堪身世老南滇。」（「夢裏湖山為孫懷

玉作」を一読すれば、杭州に滞在した痕跡が明晰であり、「江長巴子国、地入夜郎城。昔我經過処、因君動遠情」（「送僧帰重慶」）に即していえば、重慶や貴州を通過したことがわかる。さらに、「東西千万里、来去一身軽。碧鳳山前別、黄梅雨裏行。（「送僧帰重慶」）の「碧鳳山」は、昆明にあり、「此楼登眺好、終日俯平湖。葉尽村村樹、花残岸岸蘆。漁翁晴独釣、沙鳥晚相呼。何處微鐘動、雲藏島寺孤。」（「題竜関水楼」）では、大理の竜関水楼に登って景色を眺めている。このように、彼は最後に雲南にたどり着いたと考えられる。

天祥の渡明の具体的な時間を知る仕立てに欠けるが、「十年遊子在天涯、一夜秋風又憶家」（「榆城聴角」）からは、中国に渡来して10年以上の歳月が経過したことが察せられる。そのため、「老眼非無涙」（「哭宋士熙」）、「老年銷記性」（「次韻惟心見寄」）、「可堪身世老南滇」（「夢裏湖山為孫懷玉作」）というように、老年の心境を表す語句が複数の詩に現れる。大理で最後の人生を全うしたと考えてもよさそうである。

2. 僧機先

『滄海遺珠』巻四に、下記の僧機先の漢詩が18首掲載されている。「寄西山石隠」（七律）、「長相思」（一首）、「寄仲翔外史」（五律）、「送別」（五律）、「挽逸光古先生」（五律）、「梁王閣」（七律）、「滇陽六景」六首（「金馬朝暉」七律、「碧鷄秋色」七律、「玉案晴嵐」七律、「滇池夜月」七律、「竜池躍金」七律、「螺峯擁翠」七律）、「除夕」（五絶）、「寄石隠」（五絶）、「聞笛」（七絶）、「送僧帰石城」（七絶）、「雪夜偶成二首」（七絶2首）と、五律・五絶5首、七律・七絶12首、その他1首となっている。

僧機先の事跡を知るすべもないが、「前年寄書吳王台、西湖楊柳青如苔」（「長相思」）に見られるように、天祥と同様に、杭州を訪れたことがあり、「吟中二十年三昧、未了梅花一首詩」（「雪夜偶成二首」）からは、詩吟の歴史が長いことがわかる。また、彼の「老逢諸事懶、病覚故交疏」（「寄仲翔外史」）や「白首相逢処、青雲送別情」（「送別」）では、大理で年を取ることが見て取れる。そして、次の「挽鑑機先和尚」という詩では、彼は大理で死去したことが明白である。

挽鑑機先和尚

鑑機先和尚を挽ふ^{とむら}

— 胡粹中

曾将一葦渡瀛洲	曾て一葦を将て瀛洲に渡り
信脚中原万里遊	脚を中原にまかせて、万里に遊ぶ
日出扶桑極東処	日は出づ、扶桑極東の処
雲帰滇海最西頭	雲は帰る、滇海西最の頭
経留髥几香猶地	経、髥几に留まり、香なほ地 ^{くすぶ}
棋斂紋楸子未收	棋、紋楸に斂 ^{おさ} まり、子、未だ收めず
老我飄蓬江漢上	老いたる我、江漢の上に飄蓬す
幾回中夜惜湯休	中夜に幾回か湯休を惜しむ、

（『滄海遺珠』卷三）

と、日本から渡航した彼は、中国各地を歩き回き、雲南にたどり着いた。経書を机に残し、線香の灰を片付けないまま、死去した彼は、囲碁が趣味だったという。また、この詩のテーマからは、鑑機先和尚とも表記される。この詩の作者胡粹中は、名は由、粹中は字、浙江山陰の人。明洪武のころ、昆明に左遷され、永楽初年に著名な『元史統編』を著わす。

3. 僧大用

『滄海遺珠』卷四の最後に、大用の詩が収録されている。「挽遼光古」（五律）という一首のみである。

挽遼光古	遼光古を挽ふ
氣宇自豪邁	氣宇、自ずから豪邁
孤超傲世時	孤超、世を傲 ^{あなど} る時
冥鴻冲漢志	冥鴻、漢を冲する志
野鶴出塵姿	野鶴、塵より出づる姿
筆勢雲烟起	筆勢、雲烟起こり
詩名草木知	詩名、草木すら知る
論交三十載	交を論ずること三十載
死別抱長悲	死別して長き悲を抱く

詩中の遼昶は、字は光古、覃懷⁽¹⁴⁾の人、『滄海遺珠』卷二に、彼の「画眉」「舟下淮水」など20数首の詩が収録されている。『万曆雲南通志』では、遼昶、字は光古、

懐慶の人。洪武の初めに雲南守りに派遣され、遂、地元で定住した。経術に通じ、詩賦を能くする。著に方外集。とある⁽¹⁵⁾。遼光古はそれ以外に、『遼光古集』⁽¹⁶⁾『遼光古詩集』⁽¹⁷⁾があるというが、未見。

僧大用については、松崎鶴雄はこのように記している。

大用、名は有諸、字は大用、幼にして太清宗渭の門に投じ参詳功を累ねて印可を得た。後播州の宝林寺に住し、又建仁寺、南禅寺等に住す。応永二十年(1413)南禅記を著し、永享四年(1432)雪村大和尚行道記を著す。其生死年月寿臘を詳にせず。

とある。松崎はさらに、「大用は五山の名僧であるが、支那に遊んだ記事は、五山詩僧伝にも五山文学列伝にも見えて居らぬが、天祥と時代が近い」入明僧と認めている⁽¹⁸⁾。

宝林寺、建仁寺、南禅寺の住職を歴任した大用は、果たして『滄海遺珠』登場の大用と同一人物であるかは、さらに検討の余地があろう。しかし、後者は、陶宗儀の『書史会要』記載の大用とは同じ人物であろうという説は、事実に近いかもしれない。前掲の高田時雄氏の論文ではそれを首唱し⁽¹⁹⁾、その後、伊藤幸司氏は新しい資料を加え、さらにこの説を推進した⁽²⁰⁾。

しかし、管見の限り、最初に『滄海遺珠』と『書史会要』の大用を同一人物と比定したのは、清の翁広平(1760—1842)である。彼は清代日本研究の代表作なる『吾妻鏡補』巻22に日本人の漢詩を掲げる前に、作者の紹介を行う。大用の「挽^{ママ}遼光古」という詩の前に、このように記している。

釈克全、字大全 陶宗儀記外域書、曩與其國僧克全、字大用者、偶解后於海陬一禅刹中。頗習華言、云彼中自有国字、字母僅四十有七、能通識之、便可解其音義。因索写一過、就叩其理、其聯湊成字处、髣髴蒙古字法也。全又以彼中字体、写中国詩文、雖不可読、而筆勢從横、龍蛇飛動、儼有顛素之遺⁽²¹⁾。

とある。小見出しの「字大全」は「字大用」の書写ミスであるが、『書史会要』巻八外域記載の大用克全条を引用している。『書史会要』の成立は洪武九年(1376)なので、陶宗儀が海浜の禅刹で大用と邂逅したのは、その以前のことである。また、遼光古の卒年は確定できないが、永楽八年(1410)には、彼は自分の詩集の序文を

『滄海遺珠』の編者沐昂に依頼したため、永樂八年以降になくなったはずである。このように詮索すれば、大用克全の中国渡航は、少なくとも30年以上の春秋を閲していることが明らかになる。この点に関しては、大用の詩「挽遼光古」の尾聯「論交三十載、死別抱長悲」からでも、一つの証拠となるであろう。大用と遼光古の交遊は、実に30年にも亘っているし、大用の大理流寓もこれ以上の年月になることが察せられよう。

さて、大用は『滄海遺珠』の編者沐昂と直接に交わった記録がある。沐昂の詩文集『素軒集』に、「和僧大用詩韻四首」という詩があり、そのうちの第四首では、このように吟じている。

蕭瑟西風宇宙清	蕭瑟西風、宇宙清し
授衣猶起故鄉情	授衣、なお故郷の情を起こすごとし
雲霄望斷無鴻雁	雲霄、望断すれども鴻雁無し
唯有栖鴉噪晚晴 ⁽²²⁾	ただ栖鴉有りて晚晴に噪ぐのみ

頷聯の「授衣」は旧暦九月の別称で、秋に入っているが、日本からの音信もなく、はるか日本のかなたを茫然と眺めている大用の様子が描かれている。思郷の念に耽っている大用の心情をリアルに伝えている。

二、『滄海遺珠』所収日本人の漢詩の特色

以上、『滄海遺珠』所収の僧天祥11首、僧機先18首、僧大用1首の漢詩、および3人について紹介した。次に、これらの漢詩の特色を見てみよう。

30首の漢詩は、便宜的に内容から下記の二通りに分けられよう。

1. 景色描写類

雲南の景色を中心に描いた詩。「題竜関水楼」、「長安春日作」、「榆城聴角」、「暮春病懐」（以上、僧天祥）、「梁王閣」、「滇陽六景」六首、「除夕」、「聞笛」、「雪夜偶成二首」（以上、僧機先）と15首である。そのうちの律詩「題竜関水楼」（竜関水楼に題す）は、前の四句でこのように吟じている。

此楼登眺好	此の楼に登れば眺め好く
終日俯平湖	終日平湖を俯す

葉盡村村樹 葉は尽く村村の樹
花残岸岸蘆 花は残る岸岸の蘆

と大理の竜関水楼から眺めた景色を描いている。「葉盡村村樹、花残岸岸蘆」は、村の木の葉が落ち、岸辺の蘆の花が散っている秋色を、疊字や倒置法の手法でうまく描写し、後世の人にも賞賛されている。また、天祥の「榆城聴角」（榆城に角を聴く）もよく後世の人々に引用されている。

十年遊子在天涯 十年、遊子天涯に在り
一夜秋風又憶家 一夜、秋風に又た家を憶ふ
恨殺葉榆⁽²³⁾ 城上角⁽²⁴⁾ 恨殺す葉榆城上の角
曉來吹入小梅花 曉來吹きて小梅花を入る

と十年も故郷を離れ、異国にいる私は、ある夜の秋風に、また故郷が思い出された。ようやく寝入っていたにもかかわらず、曙に葉榆城の辺りから「小梅花」という笛の音が聞こえてきて、郷愁の念がますます深まった、という。

2. 交友類

友人と交わる詩。「寄南珍」「次韻惟心見寄」「贈李生」「送僧帰重慶」「哭宋士熙」「呈同社諸友」「夢裏湖山為孫懷玉作」（以上、天祥）、「寄西山石隱」「長相思」「寄仲翔外史」「送別」「挽遼光古先生」「寄石隱」「送僧帰石城」（以上、僧機先）、「挽遼光古」（僧大用）という15首である。これらの詩を読む限り、入明僧は雲南に流されたとはいえ、現地の人々との交際の自由は束縛されていなかったようである。交友類詩の中で、たとえば、機先の「挽遼光古先生」（遼光古先生を挽^{とむら}ふ）という詩が、二人の友情の深さが伺える。

昨日來過我 昨日は来りて我を過^よぎりしに
今朝去哭君 今朝は去きて君を哭す
那堪談笑際 那んぞ堪えん談笑の際
便作死生分 便ち死生の分れを作^なす
(下略)

と、昨日あなたは私を訪ねて来たのに、今日私はあなたのところに伺い、あなたを哭することになった。どうして笑談するとき、直ぐに死に別れになるのに堪えられ

るであろうか、という。

また、同じ機先が吟じた「哭宋士熙」（宋士熙を哭す）では、宋士熙を哀悼する心情をリアルに伝えている。

衆山揺落日　　衆山落日を揺らし
 那忍哭先生　　那んぞ先生を哭すに忍びん
 老眼非無涙　　老眼涙無きに非ず
 深交最有情　　深交最も情あり

（下略）

以上のような詩は、中国の文献に現れた同時代の他の日本人の漢詩に比べれば、その特色がいっそう明白であろう。たとえば、入明僧の景色を口ずさんだ漢詩にこのようなものがある。

詠柳　　柳を詠ず
 　　　　一日本貢使
 湧金門外柳如金　　湧金門外、柳、金の如し
 三日不来成緑陰　　三日来たらざれば緑陰を成す
 折取一枝城裡去　　一枝を折り取り城裡に去き
 教人知道是春深　　人をしてこの春の深きことを知道せしむ

（明、姚旅『露書』卷九）

と日本の貢使が、西湖の湧金門という名所に植えてある柳を吟する漢詩である。これらの景色描写類の漢詩は、天祥らの詩とあまり相違が見られないが、それ以外に、イデオロギー的な詩も少なからず書かれている。

答大明皇帝問日本風俗　　大明皇帝の日本風俗を問ひしに答ふ
 　　　　　　　　　　　　一噶哩嘛哈

国比中原国　　国は中原の国に比すも
 人同上古人　　人は上古の人に同じ
 衣冠唐制度　　衣冠は唐の制度
 礼楽漢君臣　　礼楽は漢の君臣
 銀甕筭清酒　　銀甕、清酒を筭し^{しゅう}

金刀膾紫鱗 金刀、紫鱗を膾す
年年二三月 年年二三月
桃李自陽春 桃李、自ずから陽春たり

(清、朱彝尊『明詩綜』卷九十五)

と、中国に派遣された嗜哩嘛哈は、明太祖に会い、日本の風俗を尋ねられた際に賦したという詩。詩では、日本の人種、制度、食べ物、自然等、すべて中国にひけをとらないと言っている。さすがの明帝もこの詩を見て、「初欲罪其不恭、徐乃貫之」⁽²⁵⁾と逆鱗に触れられたらしい。

この詩のほかに、たとえば、次のような緊迫した情勢を伝える詩もある。

張太守禁舟中嘆懷 張太守に舟中に禁じられ嘆懷す
一宣用琳

老鶴徘徊日本東 老鶴徘徊す日本の東
笑看宇宙作樊籠 宇宙、樊籠となるを笑ひ看る
空教飛入堯天闊 空教、堯天の闊きに飛び入って
還在扁舟一葉中 還いまだ扁舟一葉の中に在り

(清、翁広平『吾妻鏡補』卷二十二⁽²⁶⁾)

と禁足を命じられたことを詠っている。

これと類似したテーマのものに、次の詩がある。

奉辺將詩 辺將に奉ずるの詩
一無名氏
棄子拋妻入大唐 子を棄て妻を抛げ大唐に入る
將軍何事苦提防 將軍何事ぞ、提防に苦しむ
関津橋上団円月 関津橋上、団円の月
天地無私一樣光⁽²⁷⁾ 天地無私、一樣の光

と妻子と別れて中国に入ったのに、禁足がかかり、厳しく防備されている。しかし、関所の橋の上にかかる満月は、一樣に日本と中国の天地を照らしている、という。

以上の漢詩に反して、『滄海遺珠』所収の日本人漢詩は、流罪という身分上の束縛にもよるが、まったくそのような色が見えず、全体として景色や友情を歌う、穏

やかなものが多い。彼らの詩は、一縷の思郷の念が込められているものが多数あるが、下記の機先の「長相思」のように、強烈に訴える作品さえある。

(前略)

欲弾朱絃絃断絶 朱絃を弾ぜんと欲すれど絃断絶し

欲放悲歌声哽咽 悲歌を放たんと欲すれど声哽咽す

(中略)

長相思 長如許 長く相い思ふ 長きこと許くの如し

千種消愁愁不舞 千種愁ひを消せども愁ひて舞はず

乱絲零落多頭緒 乱絲零落して頭緒多し

但将淚寄東流波 但だ涙を将て東流の波に寄せん

為我流入扶桑去 我が為に扶桑に流入して去らんことを

三、『滄海遺珠』所収日本人の漢詩の流布

日本人の漢詩 30 首が、幸いにも辺境地帯に生まれた詩集『滄海遺珠』に収録されているが、もし、その詩が他の地域に伝わらなければ、その影響も雲南一隅に埋まれるのであろう。これらの漢詩は、中国で如何なる範囲で流布したかを調べることにした。その結果を附表にまとめてみた。

まず、引用文献であるが、明清時代の 8 種の文献が、これらの漢詩を引用していることが浮き彫りになった。そのうち、『吾妻鏡補』が最多の 22 首で、『列朝詩集』がその次の 21 首、そして、『石倉歴代詩選』と『四朝詩』は、肩を並べて 17 首となっている。

8 種の引用文献のうち、前の 6 種は詩集。1 番目の『古今禪藻集』は 28 卷、明釋正勉・釋性通編。東晋以来明代までの高僧の詩 3 千余首を収集した、僧詩の集大成と言われている。2 番目の『明詩鈔』は 9 卷、明遺民彭孫貽編、氏の 23 卷の『茗齋集』に付録として収録されている。3 番目の『石倉歴代詩選』は 506 卷、明曹学侖編。古代から明代までの詩を、古調 13 卷、唐詩 100 卷、拾遺 10 卷、宋詩 107 卷、金元詩 50 卷、明詩初集 86 卷、次集 140 卷に編集。十二代詩選とも称せられる。4 番目の『列朝詩集』は 81 卷、清錢謙益編。明代 1700 人の詩を入れた明詩の総集。

そのうちの閩集には、名僧、香奩、宗室、神鬼、外夷（滇南、朝鮮、日本、交趾、占城）の詩を収めている。5番目の『四朝詩』は313巻、清張豫章等奉勅編。『御選宋金元明四朝詩』とも言われるように、宋金元明の詩人計5800人の詩を収録。6番目の『明詩綜』は100巻、清朱彝尊編。明初から明末までの3400人（遺民を含む）の詩を収めた明詩の総集。

詩集の他に、日本研究著書にも引用されている。7番目の『日本図纂』は1巻、明鄭若曾が著わした明代の日本研究の代表作。8番目の『吾妻鏡補』は30巻、清翁広平が撰した清代前期の日本研究の代表作。

とにかく、以上の6種の詩集は、スケールが大きい、明清時代の代表的なアンソロジーである。また、7番目と8番目は、明清時代の日本研究代表作である。これらの著書は同時代、ないし後世に少なからずの影響を及ぼしているので、これらの日本人の漢詩もそのおかげで、広く長く中国人に読まれていたのであろう。

次に、被引用数ランキングであるが、「榆城聽角」（機先）が一番で8種、「長安春日作」（同）が次席に譲る7種、「寄南珍」、「題竜関水楼」、「送僧帰重慶」、「暮春病懷」、「挽遼光古先生」（以上天祥）が3位で、それぞれ5種の文献に引用されている。

機先の「榆城聽角」は前述のとおりであるが、同「長安春日作」は下記のとおり。

何事長安客	何事ぞ長安の客
春来思易迷	春来たれば思ひ迷ひ易く
楽遊原上草	楽遊原上の草
無日不萋萋	日々に萋萋たらざることなし

詩中の楽遊原は長安城南にあり、唐代長安城内における最高の地で、楽遊廟（別名楽遊苑、楽遊原）があり、長安の全景を見下ろせるので、観光名勝となっている。李商隱の名高い「向晚意不適、驅車登古原。夕陽無限好、只是近黃昏（晩に向^{いた}り意通はず、車を驅って古原に登る。夕日、限り無く好し、只だこれ黃昏に近し）」の詩題は、すなわち「楽遊原」である。盛んに咲いている草を見て、長安の客としての私の心の琴線に触れられ、思郷の念に耽る様子が描かれる。

四、『滄海遺珠』所収日本人の漢詩をめぐる評価

『滄海遺珠』に対する評価は、前稿ですでに述べたが、『滄海遺珠』所収日本人の漢詩に対する評価は、管見の及ぶ限り、明代の胡維霖がその嚆矢を成すかもしれない。彼は「墨池浪語」（明詩評三）で、「天祥、機先俱日本人、一則工于写景、一則工于描情。如機先之「長相思、思従何処来」⁽²⁸⁾と、天祥は景色描写に堪能、機先は人情描写に長じると指摘した上、機先の「長相思」を具体例として掲示している。

また、天祥の「題虚邱寺」はすでに前に掲げているが、その頸聯に「楼台半落長洲苑、簫鼓時來短簿祠」（楼台、半ば落つる長洲苑、簫鼓、時に來たる短簿祠）がある。虚邱寺はすなわち蘇州にある虎丘寺のこと。その東側に短簿祠がある。短簿祠は王珣（349—400）を祭る廟である。王珣、東晋の人、王羲之の侄、尚書令等を務めた。背が低くて主簿を担任したことから、「短簿」と言われる。清の名高い文学者なる尤侗（1618—1704）は、かつてこのように指摘している。

鈍翁が顧云美に贈る詩に、「家臨綠水長洲苑、人在青山短簿祠」とあり、佳句と言われているが、私は沐景顛の『滄海遺珠集』を読み、中に日本の使臣なる天祥の「題虚邱寺」があり、詩曰く、「楼台半落長洲苑、簫鼓時來短簿祠」といい、日本人のほうが先に書いている。汪は、日本人からの盗作か、偶然に古人と一致したのか、という⁽²⁹⁾。

とあり、詩中の「長洲苑」と「短簿祠」の用典を問題視している。文中の鈍翁は、清初の文学者汪琬（1624—1691）のこと。字は茗文、鈍庵を号とする。江蘇長州（今、蘇州）の人。順治十二年（1655）の進士、刑部郎中、戸部主事、翰林院編修等を務め、晩年、太湖の堯峰山に隠居して、堯峰先生と呼ばれる。

また、相似した指摘は、尤侗に遅れて、査為仁（1693—1749）もしている。

汪茗文編脩琬の人に贈る句に「家臨綠水長洲苑、人在青山短簿祠」とある。沐景顛『滄海遺珠集』所収日本使臣なる天祥の「題虚邱寺」という詩中の「楼台半落長洲苑、簫鼓時來短簿祠」の句と暗に合っている。しかし、よく味わえば、主旨もおおののの違い、風格もまた自ずから同じではない⁽³⁰⁾。

とある。尤侗と異なり、偶然の一致説を唱えている。

降って、20世紀末から21世紀初頭にかけて、『滄海遺珠』所収の日本人の漢詩

が再び世人の耳目を引くようになり、それを賞賛する文章が下記のごとく多数誕生してきた。

「明代日本詩僧詠雲南」では、機先の「滇陽六景」「長相思」、天祥の「題竜関水楼」「呈同社諸友」「贈李生」「哭宋士熙」「榆城聴角」、大用の「挽遼光古」を賛美している⁽³¹⁾。

「大理為何有日本「四僧」塔」では、機先や天祥の詩を触れ、特に後者の「売雪詩」に賛辞を送っている⁽³²⁾。

「雲南最早の詩歌総集」では、機先の「滇陽六景」「梁王閣」、天祥の「榆城聴角」を高く評価している⁽³³⁾。

また、冒頭の先行研究に掲げているように、孫太初、王叔式、古永継等が、相次いで論文を書き、これらの日本人漢詩を研究し、評価している。

さらに、これらの詩は現代中国人が編集した詩集にも採用されている。たとえば、『中日詩誼』（黄鉄城他編、陝西人民出版社、1995年3月）には、僧機先の「梁王閣」「金馬朝暉」「滇池夜月」「碧鷄秋色」「玉案晴嵐」「螺峯擁翠」「竜池躍金」という詩、および僧天祥の「哭宋士熙」「夢裏湖山為孫懷玉作」「贈李生」「題竜関水楼」という詩を掲載している。

また、『日本漢詩擷英』（王福祥他編、外語教学与研究出版社、1995年12月）では、僧天祥の「長安春日作」「題竜関水楼」「贈李生」「送僧帰重慶」「榆城聴角」「暮春病懷」「呈同社諸友」「夢裏湖山為孫懷玉作」という詩、そして、僧機先の「寄石隠」「寄仲翔外史」「聞笛」「雪夜偶成」「梁王閣」という詩をそれぞれ収録している。

結び

以上、『滄海遺珠』所収の日本人の漢詩について考察してきた。これらの考察を通して、天祥、機先、大用が書いた漢詩、およびその特色、流布、後世の評価が明らかになった。これらの漢詩を通じて、以下のようなことがいえよう。

まず、日本人が600年前に辺鄙な雲南に流された史実を確認できた。これらの漢詩が残っていなければ、そういう史実も歴史の埃に埋没され、日の目を見ることがなかろう。

また、これらの漢詩の作詩については、先行研究で多くなされているため、小論ではとくに注力していないが、技巧上や言葉遣い等において、普通の日本人に見られるような「倭臭」が見当たらず、日本人と明言しないかぎり、中国人と間違えられるよう立派な詩ばかりである。海外に残された五山文学の文化遺産とみなされてしかるべきである。

そして、明代の中日関係といえば、胡惟庸クーデター事件と倭寇がまず挙げられよう。どちらも中日関係にマイナスの影響を与え、中国人の日本認識に影を落とした事件である。明清時代を通して今日まで伝わるこれらの平和的な漢詩は、日本認識への新しい視野を提供しうると思われる。

最後に、これらの漢詩が、多数の権威の高い、影響力のある詩文集に転載されたことは、その詩の芸術性が中国の学界でも認められることを意味している。この意味で、彼らは日本人の血が流れ、日本の国籍を有しているものの、雲南に土着し、地元の人々と友好的に付き合い、文化的には中国人になったといえよう。

(追記) 拙論の読み下しについては、二松学舎大学佐藤進教授に直していただいた。また、執筆に当たっては、日野俊彦氏や陳小法副教授にお世話になった。記して感謝の意を申し上げたい。

注

- (1) 『柔父隨筆』(東京、座右宝刊行会、1943年)所収。なお、松崎の著書は、他に『呉月楚風: 中国の回想』(杉村英治編、東京、出版科学総合研究所、1980)等がある。
- (2) 杉村英治「雲南の日本詩僧」、『東洋文化』復刊第67号、1991年9月。高田時雄「六百年前の雲南留寓日本僧」、『しにか』2の11、1991年。黄光武ほか「中国・雲南に流罪となった南北朝時代の日本人僧たち」、『歴史街道』7、1996年。向山寛夫「明初の訪中日本人僧侶たちの雲南への留謫」、『國學院雑誌』第101巻第4号、2000年。伊藤幸司「日明交流と雲南」、『仏教史学研究』第52巻第1号、2009年10月。
- (3) 孫太初「明初留寓雲南的日本僧人」、『思想戦線』1980年第3期。王叔式「明初旅滇的日本僧人」、『雲南民族学院学報』1991年第3期。謝道辛「大理的日本四僧塔与到大理的日本僧人」、『白族文化研究』、北京、民族出版社、2002年。古永継「明初の中日関係与寓滇日僧」、『西南边疆民族研究』2009年第6輯。
- (4) 大理州博物館・大理州文管所「大理日本四僧塔調査、清理報告」、『雲南文物』2002年第2期。

- (5) 後世の研究では、それは明太祖朱元璋が胡惟庸の勢力を一掃するための架空の事件がわかった。呉晗「胡惟庸党案考」(呉晗『歴史的鏡子—呉晗講歴史』、北京、九州出版社、2008年、125ページ)等を参考されたい。
- (6) 「明初、東瀛高僧紀先、照寂、斗南、天禪、彥宗、洪幻、曇演、大用、天祥、天梵、原果至榆。十僧於元至正至京都、事元。明初因事得罪、太祖平滇、貶屬大理。総兵徐進好仏事、喜交文士。知十僧遠渡東洋至神州、習漢文化、博識仏学。曾拜高僧仏燈、仏源為師。礼敬天朝、以礼待之。安置十僧於弘聖寺、共事雀巢長老。長老給以衣磔、脱囚籍為弘聖寺護法僧、并封斗南、天祥為知客執事。(後略)」明張繼伯『葉榆稗史』弘聖寺東瀛僧天祥の条。大理州文聯編『大理古佚書鈔』(昆明、雲南人民出版社、2002年)所収、493ページ。なお、『大理古佚書鈔』には、李浩『三迤隨筆』、玉笛山人『淮城夜語』、張繼伯『葉榆稗史』という三書が収録されている。いずれも明人の著書とされる。
- (7) 侯冲「『大理古佚書鈔』是偽書弁」、同『雲南与巴蜀仏教研究論稿』(北京、宗教文化出版社、2006年)所収、480ページ。
- (8) 伊藤幸司氏の研究では、『滄海遺珠』所載の僧機先が書いた漢詩「寄西山石隠」と「寄石隠」で触れた「石隠」も、雲南に移送された入明僧という。「日明交流と雲南」、『仏教史学研究』第52巻第1号、2009年10月、41ページ。
- (9) 翁広平著、王宝平解題『吾妻鏡補』卷二十二、京都、朋友書店、2007年、447ページ。
- (10) 張繼伯『葉榆稗史』弘聖寺東瀛僧天祥の条。大理州文聯編『大理古佚書鈔』、493—494ページ。なお、括弧内の詩題は、筆者が便宜上つけた。
- (11) 松崎鶴雄「雲南に於ける日本詩僧の遺韻」、『柔父隨筆』、197～198ページ。
- (12) 北村沢吉『五山文学史稿』第三篇(上)第七章、1942年、445、446ページ。
- (13) 「天祥喜詩、寡言、書畫皆妙、善書蘭亭、筆意入神。(中略)天祥七十四坐化、葬弘聖寺後、斗南、遼光古墓北十步、為六方幢型。刻詩碑四於靈塔、選詩六十首、達果撰書。」張繼伯『葉榆稗史』弘聖寺東瀛僧天祥の条。大理州文聯編『大理古佚書鈔』、494ページ。
- (14) 『滄海遺珠』卷二「遼昶」条による。覃懷は夏の時の称で、元の時代、「懷慶路」と改称せられ、明洪武元年(1368)十月、懷慶府となる。現、河南省焦作市、済源市・新郷市の原陽県に相当。
- (15) 遼昶、字光古、懷慶人。洪武初戌雲南、遂家焉。通経術、能詩賦、所著有方外集。『万曆雲南通志』卷十『官師志・雲南府流寓』。
- (16) 『明詩綜』卷十一「遼昶」条。
- (17) 沐昂「題遼先生詩集序」、永楽庚寅(八年、1410)冬十月撰。『素軒集』卷十一、418ページ。『回族典藏全集』(蘭州、甘肅文化出版社・寧夏人民出版社、2008年)155冊所収、明木刻本。
- (18) 松崎鶴雄「雲南に於ける日本詩僧の遺韻」、『柔父隨筆』、201ページ。
- (19) 高田時雄「六百年前の雲南留寓日本僧」、『しにか』2の11、1991年、20ページ。
- (20) 伊藤幸司「日明交流と雲南」、『仏教史学研究』第52巻第1号、2009年10月、34ページ。
- (21) 翁広平著、王宝平解題『吾妻鏡補』卷二十二、453ページ。
- (22) 『素軒集』卷十、370ページ。
- (23) 葉榆：大理のこと。

- (24) 角：古代の楽器名。西北游牧民族に源を發し、角を吹くことで朝晩を示す。軍隊では軍号に用いることが多い。
- (25) 清褚人獲『堅瓠集』五集卷二「倭使詩」条。ちなみに、文中の「徐乃貫之」の「貫」は、「慣」に通じ、「甘やかす、大目に見る」の意。
- (26) 翁広平著、王宝平解題『吾妻鏡補』卷二十二、445 ページ。
- (27) 翁広平著、王宝平解題『吾妻鏡補』卷二十二、445 ページ。
- (28) 胡維霖『胡維霖集』卷二、5 ページ、明崇禎年間刊。なお、機先の「長相思」に「思從何処來」一句が見つからない。胡維霖の記憶ミスか、別の版本によるか、定かではない。
- (29) 「鈍翁贈顧云美詩、家臨綠水長洲苑，人在青山短簿祠。人稱佳句。予閱沐景顒滄海遺珠集、有日本使臣天祥題虎丘寺詩云、樓台半落長洲苑、簫鼓時來短簿祠。居然先得之矣。汪豈儉句于倭、或所謂与古人暗合者耶。」尤侗『良載雜說』卷五、68 ページ
- (30) 「汪茗文編脩琬贈人句云、家臨綠水長洲苑，人在青山短簿祠。与沐景顒『滄海遺珠集』所載日本使臣天祥「題虛邱寺」「樓台半落長洲苑、簫鼓時來短簿祠」之句、似暗合。細味之、用意各別、詩格亦自不同。」查為仁『蓮坡詩話』（『蔗塘外集』とも）卷下、5 ページ。
- (31) 雲南教育出版社文化教育讀物編輯室「明代日本詩僧詠雲南」、余嘉華主編『雲南風物志』、昆明、雲南教育出版社、1997 年第 6 刷、336 ページ。
- (32) 李光榮「大理為何有日本「四僧」塔」、王子榮主編『大理文化之旅 300 問』、昆明、雲南民族出版社、2006 年、60 ページ。なお、李光榮氏は「売雪詩」を天祥の作としているが、その出典については、揭示していない。清朱彝尊『靜志居詩話』（卷二十）、同『明詩綜』（卷七十四）、清姚之駟『元明事類鈔』（卷一天文門）、清張預章『四朝詩』（明詩卷十四樂府歌行十一）等では、すべて「売雪詩」を「売雪詞」と、作者を「施武」とするので、天祥説には再考の余地がある。
- (33) 李孝友「雲南最早的詩歌總集」、雲南日報理論部編『雲南文史博覽』、昆明、雲南人民出版社、2003 年初版、2009 年第 4 刷、282 ページ。

附録：『滄海遺珠』日本人漢詩引用文献一覧表

文 献 詩 題	古今禪 藻集 (4首)	明詩鈔 (1首)	石倉歷 代詩選 (17首)	列朝詩 集 (21首)	四朝詩 (17首)	明詩綜 (5首)	日本図 纂 (9首)	吾妻鏡 補 (22首)
一、僧天 祥 1. 寄南珍			卷 366 明詩初集 八十六	閩集卷 6	明詩卷 67 五言 律詩十八	卷 95		卷 21
2. 題竜関 水楼			同上	同上	同上		卷 4	同上
3. 次韻惟 心見寄			同上	同上	同上			同上
4. 贈李生			同上	同上	同上			同上
5. 送僧帰 重慶	卷 22		同上	同上	同上			同上
6. 哭宋士 熙			同上	同上				同上
7. 呈同社 諸友			同上	同上	明詩卷 91 七言律 詩二十四			同上
8. 夢裏湖 山為孫懷 玉作			同上	同上	同上			同上
9. 長安春 日作	卷 26 明 五言絶句		同上	同上	明詩卷 100 五 言絶句五	同上 但し、「長 安春日」 とす	同上	同上
10. 榆城 聴角	卷 27 明 七言絶句。 但し、作 者は「道 衍」とす	卷九	同上	同上 閩集二。 但し、作 者は「惟 則」とす	明詩卷 114 七言 絶句十四。 但し、作 者は「惟 則」とす	同上	同上	同上
11. 暮春 病懷			同上	閩集六	明詩卷 116 七言 絶句十六		同上	同上
二、僧機 先 1. 寄西山 石隠			同上	同上				同上
2. 長相思			同上	同上	明詩卷 15 樂府歌行 十二			同上
3. 寄仲翔 外史				同上	明詩卷 67 五言 律詩十八			同上
4. 送別			同上		同上	同上		同上

5. 挽遼光古先生	卷 22		同上	同上		同上		同上
6. 梁王閣				同上	明詩卷 91 七言律詩 二十四		同上 但し、「碧鷄秋色」 の後に列す	同上
7. 金馬朝暉								
8. 碧鷄秋色				同上	明詩卷 91 七言律詩 二十四		同上	同上
9. 玉案晴嵐								
10. 滇池夜月								
11. 竜池躍金								
12. 螺峯擁翠								
13. 除夕								
14. 寄石隱				同上				同上
15. 聞笛				同上	明詩卷 116 七言 絶句十六		同上	同上
16. 送僧婦石城			卷 329 明詩初 集 49。但 し、作者 は「王遠」 とす。					
17. 雪夜偶成二首				同上	明詩卷 116 七言 絶句十六 (定起一 首)		同上	同上
三、僧大用 1. 挽遼光古			卷 326 明 詩初集 46	同上			同上	同上

備註：鄭舜功『日本一鑑』（1565年）、王士驥『皇明馭倭録』（1573年）、嚴從簡『殊域周咨録』（1574年）、李言恭・郝傑『日本考』（1592年頃）、侯繼高『日本風土記』（1592年以前の成立）等の明代中国人の日本研究書には、他の日本人の漢詩は収められているが、この3人の漢詩は未収。

図録 1

<p>巴陽夜泊</p>	<p>獨棹三巴夜秋高片月孤灘聲將客夢萬里下東吳</p>	<p>塞上曲</p>	<p>八月秋高塞草斑將軍千騎獵前山彎弓不射南飛雁 恐有征人附信還</p>	<p>南行途中寄錢塘親友</p>	<p>萬里移家入瘴烟故鄉音耗若為傳衡陽自古無來鴈 況去衡陽又八千</p>	<p>欽定四庫全書</p>	<p>滄海遺珠 卷四</p>	<p>五</p>	<p>曹溪夜泊</p>	<p>空山孤驛鼓逢逢明月流輝滿大江水鳥夜寒栖不穩 一雙飛影過蓬窓</p>	<p>漁人</p>	<p>浪跡烟波薄利名釣舟長傍酒家橫白魚青菜桃花飯 不識憂愁過一生</p>	<p>讀程原道昆陽詩悵然有懷</p>	<p>昆陽市上美人家飲酒曾停過客車萬里相思不相見</p>
-------------	-----------------------------	------------	--	------------------	--	---------------	--------------------	----------	-------------	--	-----------	--	--------------------	------------------------------

<p>東風吹盡蜜檀花</p>	<p>試筆</p>	<p>試筆山窓竹影涼閑臨小字換鵝章定巢燕子時飛過 帶得殘花落紙香</p>	<p>僧天祥<small>日本</small></p>	<p>寄南珍</p>	<p>上人居處僻心與石泉清道在從違俗身閒不用名空 階松子落雨遲蘚花生怪得稀相見年來懶到城</p>	<p>欽定四庫全書</p>	<p>滄海遺珠 卷四</p>	<p>六</p>	<p>題龍闕水樓</p>	<p>此樓登眺好終日俯平湖葉盡村村樹花殘岸岸蘆漁 翁晴獨釣沙鳥晚相呼何處微鐘動雲藏島寺孤</p>	<p>次韻惟心見寄</p>	<p>世間無住著林下且栖遲映戶幽光發侵階亂竹垂老 年銷記性餘習未忘詩此意難為說西峰道者知</p>	<p>贈李生</p>	<p>異域無親友孤懷苦別離雨中春盡日湖外客歸時花</p>
----------------	-----------	--	-----------------------------	------------	--	---------------	--------------------	----------	--------------	--	---------------	--	------------	------------------------------

落青山路鶯啼綠樹枝從今分手後兩地可相思

送僧歸重慶

東西千萬里來去一身輕
碧鳳山前別黃梅雨裏行
江長巴子國地入夜郎城
昔我經過處因君動遠情

哭宋士熙

衆山搖落日那忍哭先生
老眼非無淚深交最有情人
猶惜才調天可厭聰明書法
并詩律空留後世名

呈同社諸友

欽定四庫全書

滄海遺珠 卷四

七

君住峰頭我水濱
相思只隔一孤雲
夜燈影向空中見
晨聲聲從樹杪聞
咫尺誰知多後夢
尋常心似遠離羣
今朝偶過高栖處
坐接微言到夕曛

夢裏湖山為孫懷玉作

杭城一別已多年
夢裏湖山尚宛然
三竺樓臺晴似畫
六橋楊柳晚如烟
青雲鶴下梅邊墓
白髮僧談石上緣
殘睡驚來倍惆悵
可堪身世老南滇

長安春日作

何事長安客春來思易迷
樂遊原上草無日不萋萋

榆城聽角

十年遊子在天涯
一夜秋風又憶家
恨殺葉榆城上角
曉來吹入小梅花

暮春病懷

落花滿地雨絲絲
九十春光又別離
行樂送春猶有恨
那堪多病過花時

僧機先日本

欽定四庫全書

滄海遺珠 卷四

八

寄西山石隱

碧雞山上雪想可埋
岩房老僧凍不死
燒葉生微陽我
欲往從之杳杳川
無梁日落尚延佇
心隨歸鳥翔

長相思

長相思相思長
有美人兮在扶桑
手攀珊瑚酌霞氣
口誦太乙朝東皇
鯨波摩天不可航
矯首欲渡川無梁
去時遺我瓊瑤章
蠻牋半幅雙鴛鴦
鴛鴦不飛墨色改
攬涕一讀三斷腸
前年寄書吳王臺
西湖楊柳青如苔
今

滇池夜月

滇池有客夜乘舟渺渺金波接素秋
白月隨人相上下
青天在水與沉浮
遙憐謝客滄洲趣
更愛蘇仙赤壁遊
坐倚蓬窓吟到曉
不知身尚在南州

龍池躍金

路入高山境更奇
玉皇壇畔有龍池
行逢柳色烟深處
坐看桃花水漲時
映日金鱗鳴撥刺
含風翠浪動淪漪
由來神物非人擾
變化雲雷未可知

欽定四庫全書

滄海遺珠
卷四

上

螺峯擁翠

螺峯近在滇城裏
下有招提倚翠屏
雨後光含僧眼碧
雲中色擁佛頭青
層崖鳥度開天險
古洞龍潛闕地靈
自是幽深回俗駕
不須重勒北山銘

除夕

昔聞蘧伯玉行年六十化
吾道竟如何
悠悠日又夜

寄石隱

古木積蒼烟
空山夜悄然
遙知崖上月
獨照病中禪

聞笛

夜深吹笛是誰家
獨倚高樓月欲斜
塞上春情無賴甚
那堪又聽落梅花

送僧歸石城

月照空山鶴在松
夢中猶聽石城鐘
今朝又向江頭別
目斷孤雲意萬重

雪夜偶成二首

畫角聲殘曙色遲
雪花如掌朔風吹
吟中二十年三昧
未了梅花一首詩

欽定四庫全書

滄海遺珠
卷四

上

定起閑吟獨倚闌
朔風吹面雪漫漫
修心不到梅花地
耐得山中一夜寒

僧大用日本

挽遠光古

氣宇自豪邁
孤超傲世時
冥鴻冲漢志
野鶴出塵姿
筆勢雲烟起
詩名草木知
論交三十載
死別抱長悲

滄海遺珠卷四